

## メッセージアウトライン 出エジプト記9:1~35

### 「疫病、腫れもの、雹の災害」

ナイル川の水が血に変わる。エジプト全土に蛙があふれる。ブヨが大発生して人や家畜に付く。アブが大発生してエジプト全土を荒れ果てさせる。四百年以上に渡ってイスラエルを苦しめてきたエジプトに対するさばきとして主はモーセとアロンを通して四つの大災害をもたらされた。しかし、ファラオがモーセに願ってそれらの災害が過ぎ去ると、彼はそのたびに心を頑なにしてイスラエルの民をエジプトから出て行かせようとはしなかった。ファラオがこのように繰り返し心を頑なにすることによって、主なる神はさらなる災害をエジプトにもたらされる。これは7:3節で主が言われた「わたしはファラオの心を頑なにし、わたしのしるしと不思議をエジプトの地で数多く行う」ということばのとおりである。主はそのようにしてイスラエルの主なる神こそ力ある真の神であることをエジプトに知らせ、その後イスラエルをエジプトから脱出させ、そのようにして主なる神の偉大さを知らされ、栄光を現わされるのである。

[1-4]主はモーセに言われた。「ファラオのところに行って、彼に言え。ヘブル人の神、主はこう言われる。『私の民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もしあなたが去らせることを拒み、なおも彼らをとどめておくなら、見よ、主の手が、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に下り、非常に重い疫病が起こる。しかし、主はイスラエルの家畜とエジプトの家畜を区別するので、イスラエルの子らの家畜は一頭も死なない。』」

これは第五番目の災害である。主はモーセを通してこのことを宣告される。これに対してファラオがモーセの言うことを聞き入れた形跡はない。

[5]また、主は時を定めて言われた。「明日、主がこの地でこのことを行う」

「明日」と時が定められたのは、この災害が偶発的なものであるという口実をファラオに与えないためである。

[6]そして確かに翌日、主はこのことをなされたので、エジプトの家畜はことごとく死んだ。しかし、イスラエル人の家畜は一頭も死ななかつたのである。馬、ろば、らくだ、牛、羊はエジプトにとって神聖な動物であった。それゆえこれは蛙の災害と同じくエジプトの神々に対するさばきとなっているのである。この疫病が具体的にどのようなものであるかはわからないが、一般的には家畜などがかかる炭疽菌による急性伝染病ではないかと考えられている。(炭疽菌の感染する部位によって症状が異なる。皮下出血、リンパ節炎、潰瘍、発熱、吐血、激しい下痢、呼吸困難等)家畜や土壌を通して人間にも感染する。

[7]「ファラオは使いを送った。すると見よ、イスラエルの家畜は一頭も死んでいなか

った。それでもファラオの心は硬く、民を去らせなかった」

結局のところ、家畜の疫病の災害は農耕を主体とするエジプト人にとってはそれほど致命的な打撃とならなかったのかもしれない。しかも疫病になったのは3節を見ると「野にいる家畜」であったので、用心深い一部のエジプト人は自分の家畜を小屋の中に入れていたのかもしれない。そのようなわけで、今回もファラオの心は頑ななままであり、イスラエルの民を去らせようとはしなかったのである。それゆえ主は第六の災害をエジプトにもたらされる。

[8-9]「主はモーセとアロンに言われた。『あなたがたは、かまどのすすを両手いっぱいに取り。モーセはファラオの前で、それを天に向けてまき散らせ。それはエジプト全土にわたって、ほこりとなり、エジプト全土で人と家畜に付き、うみの出る腫れものとなる』」

主は今度はかまどのすすを用いられる。このかまどはれんがを作るため、あるいは、いろいろな金属を精錬するためのかまどであったと思われる。イスラエル人はエジプトで日々れんが作りなどの重労働に就かされていたので、そのかまどの内側に付いた「すす」はイスラエル人の血と汗と苦しみを象徴するものであった。

[10]「それで彼らは、かまどのすすを取ってファラオの前に立ち、モーセはそれを天に向けてまき散らした。すると、それは人と家畜に付き、うみの出る腫れものとなった」

彼らはかまどのすすを両手いっぱい持ったままファラオのいる王宮へ行ったのではなく、何かの器に入れて持って行き、それをファラオの前で天に向かってまき散らしたのであろう。するとそれは確かにエジプト全土に広がり、人と家畜に付いてうみの出る腫れものとなった。これは何らかの皮膚病の一種と思われる。

[11] この腫れものはかなり症状の重いものであったようで、ファラオは例によってエジプトの呪法師たちを召し寄せて、エジプトの神々の力に頼ろうとしたが、彼ら自身も腫れものができていたのでモーセの前に立つことができなかったのである。体中の腫れものからうみの出ている見苦しい格好ではとても人前に出ることはできなかったのであろう。そしてこれは「…すべてのエジプト人にできた」と言われているので今回もイスラエル人とその家畜には被害はなかったと考えられる。これはエジプトに対するさばきで、イスラエル人は主の守りの中にあるのである。

[12]「しかし、主はファラオの心を頑なにされたので、ファラオは二人の言うことを聞き入れなかった。主がモーセに言われたとおりであった」

ファラオが頑なになったのは彼自身の行為であると同時に、主なる神の主権的な行為でもあった。これは私たち人間には理解しきれないことであるが、人間の頑固さや最悪と見える状況もすべて主の支配のもとにあり、すべてのことにおいて主のみこころがなっていくのである。そしてやがて、そのようなところを通して主の栄光が現わされるようになる。

続いて第七の災害が起こって来る。

[13]主はモーセに言われた。「明日の朝早く、ファラオの前に立ち、彼に言え。ヘブル人の神、主はこう言われる。『私の民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。』」

エジプトの呪法師たちは腫れもののためにファラオの前に立つことができなかったが、モーセは主からの恐るべき警告をもって立つことができた。

[14-16] 今回のモーセによる警告で起ころうとしている第七の災害は二つの特別な目的があることが明らかにされる。

①「わたしのよな者が地のどこにもいないことを、あなたが知るようになるため」(14)とあるようにヘブル人の神、主の唯一性、絶対性を知らせるため。

②「わたしの名を全地に知らしめるため」(16)とあるように、主なる神のすばらしさがエジプトのみではなく全地の国々に知られるようになるため。

エジプトは自分たちの敗北の出来事を記録して後代に伝えるということは決してしなかった。エジプトの歴史にはイスラエルの神、主によって大きな災害をこうむったということは記録されていない。しかし、いくらエジプト人がその出来事を葬り去ろうとしても、それは他の多くの国々に伝えられ、記録され、後代にまで伝えられていくようになる。それほど大きな力を主はエジプトで振るわれるのである。→後の時代のペリシテ人のことば→ I サムエル4:7~8

16節の前半には「しかし、このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため」とあるように主の絶対的主権が表されている。主権者はファラオではなく主なる神なのである。

[17-20] 主はファラオがまだイスラエルに対して高ぶっており、彼らを去らせようとはしないことを知っておられ、それゆえ「明日の今ごろ、わたしは国が始まってから今に至るまで、エジプトになかったような非常に激しい雹を降らせる」(18)と言われる。「明日の今ごろ」と、やはり時間が指定されているのは、この災害が単なる自然現象であるという口実を与えないためであった。

「ファラオの家臣のうちで主のことばを恐れた者は、しもべたちと家畜を家に避難させた」(20)

主はたといエジプト人であっても、主を恐れる者をあわれむことをお忘れにならないお方であることも教えられる。またこのことは、ファラオの家臣たちの中にもヘブル人の神、主がエジプトの神々よりはるかに勝ったお方であることを認めた者が多くいたということも示している。

[21]「しかし、主のことばを心に留めなかった者は、しもべたちと家畜をそのまま野に残しておいた」

彼らはエジプトに雹など降るものかと高をくくっていたのであろう。

[22-26] しかし、翌日、モーセが主のことばに従って杖を天に向かって伸ばすと主

は雷と雹を送ったので、火が地に向かって走った。「火」とは稲妻のことである。雹は積乱雲などの不安定な状態の雲から降る。したがって強い雷雨をともなう場合が多い。この時の雹はエジプトの地で国が始まって以来どこにもなかったような、きわめて激しいものであった。雹は最大で直径20cmを超えるものがあるという。この時の雹もそのような巨大なもので、それが砲弾のように地に降り注いだのである。そのような状況では地上のものは無傷でいることはできない。人も家畜も打たれ、野の草も木々もことごとく打ち砕かれてしまった。未曾有の大災害である。しかし、この時もイスラエル人が住むゴシェンの地には雹は降らなかった。それゆえ、これはエジプトに対するさばきであることがわかる。

[27-28]「ファラオは人を遣わしてモーセとアロンを呼び寄せ、彼らに言った。『今度は私が間違っていた。主が正しく、私と私の民が悪かった。主に祈ってくれ。神の雷と雹は、もうたくさんだ。私はおまえたちを去らせよう。おまえたちはもう、とどまっ  
ていてはならない。』」

激しい雷と雹を経験してさすがのファラオもショックを受けた。以前の災害ではたじろがなかったファラオも、今回は譲歩せざるを得なかった。ここでのファラオのことばには三つの重要な告白が含まれている。

- ①「今度は私が間違っていた」…彼は初めて自分の間違いを認めている。しかし、「今度は」と言っているところに、まだ砕かれきっていない彼の心の傲慢さがある。
- ②「主が正しく」…数か月前には主の存在さえ認めようとしなかったファラオの尊大な態度を考えるとかなりの変化である。彼は主が正しいお方であることを認めたのである。
- ③「私と私の民が悪かった」…自分と自分の民がイスラエルに対して悪を行ったことを認めている。このようにたとい一時的であるにせよファラオが自分の悪を認め、主が正しいお方であることを認めたということは大きな意義のあることである。さらにファラオはモーセに雹の災害がやむようにとりなしの祈りを頼み、イスラエル人はもうエジプトにとどまっ  
ていてはならず、そこから去らせようとまで口にするようになった。

[29-30] モーセはファラオが自分の約束を守らないことを知っていた。それにもかかわらず、ファラオの願いを聞き入れたのは、イスラエルの神、主こそ ありとあらゆる災害でエジプトを打つことができるお方、またそれを止めることのできるお方であり、この世界、全地はエジプトの神々やファラオのものではなく、主のものであることをファラオに知らせるためなのである。

[31-32]「亜麻と大麦は打ち倒されていた。大麦は穂を出し、亜麻はつぼみをつけていたからである。しかし、小麦と裸麦は打ち倒されていなかった。これは実るのが遅いからである」

これらの描写によってこの災害が起こったのが一月頃であったことが分かる。エジ

プトでは一月に大麦が穂を出し、二月には刈り入れをする。大麦は貧乏人や奴隷のための安いパンの原料として用いられ、亜麻は織物の原料として重要なものであった。それが大きな被害を受けたのである。しかし、もっと上等の小麦と、その一種である裸麦はまだ穂が出ておらず無事であった。小麦こそエジプトの重要な農産物であったので、ファラオの心の中ではまだ大丈夫という思いがあったのであろう。本当の意味でファラオや家臣たちはまだ主を恐れていないのである。

[33]「モーセはファラオのもとを去り、町を出て、主に向かって両手を伸べ広げた。すると雷と雹はやみ、雨はもう地に降らなくなった」

主はモーセのとりにしの祈りを聞き入れ、雷と雹と雨はやんだ。

[34-35]「ファラオは雨と雹と雷がやんだのを見て、またも罪に身を任せ、彼とその家臣たちはその心を硬くした。ファラオは心を頑なにし、イスラエルの子らを去らせなかった。主がモーセを通して言われたとおりであった」

イスラエルの主なる神によって繰り返し七つもの災害がエジプトを襲ったが、のど元過ぎれば熱さ忘れるのこぼのように、そのたびにファラオは心を頑なにし、約束をひるがえしてイスラエルの民を去らせようとはしなかった。ここまで心を頑なにする権力者も珍しいが、その頑なさが主の支配とご計画のうちに用いられ、主はそのたびにご自分の力を現わされ、エジプトの空しい偶像の神々ではなく、主こそ唯一のまことの神、力ある神であることをエジプトに知らされ、そのようにして最後には決定的にイスラエルをエジプトから脱出させられるのである。

主はイスラエルの先祖アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を決して忘れておられず、イスラエルが受けてきた苦しみも知っておられ、ついにご自分の定められた時に行動を開始され、イスラエルをエジプトから救い出されるのである。大帝国エジプトの最高権力者であるファラオもその家臣たちも主なる神の引き立て役でしかない。すべては主のご計画通りに進んで行く。それはエジプトにとっては大いなるさばきであり、イスラエルにとっては大いなる救いの実現である。

同じ神を信じる私たち信仰者もこの地上にあっては信仰のゆえに様々な苦しみを受ける時があるかもしれない。ファラオのような心頑々な人のもとで忍耐しなければならぬかもしれない。しかし、私たちが堅く信仰をもって忍耐をしていく時、ちょうどよい時に主は私たちを守り、助け、みこころのままに導き出してくださるであろう。

すでに主なる神はモーセ以上のご自分の御子イエス・キリストを私たちの救いのためにこの地上に送られ、その十字架の死によって私たちの罪を贖ってくださった。イエス・キリストこそ私たちを罪と死と滅びのエジプトから脱出させてくださる救い主である。このお方を自分の罪を贖ってくださる救い主と信じ受け入れる者は救われて神の子とされる。主なる神はご自分のひとり子イエス・キリストを十字架につけて死なせるほど私たちを愛していてくださる。それゆえ、私たちはこの地上の人生で

どのような困難や苦しみがあろうとも、すべてにおいて主のみこころがなることを信じ、信仰をもって主に自分を委ねることができるのである。

私たちはエジプトのファラオのように高慢で心を頑なにして主に繰り返し打たれるような者になるのではなく、心からの信頼をもって、主が愛する者に最善をなしてくださることを信じて、従い続ける者となっていきたい。→ I ペテロ5:6~7